‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

36号 1991.7.29
文・編集・発行
恋怪子

LIVE: クールビューティ, THE WAIATS 1991.7.13 新宿アンティノック

この日は6バンドで、アンティノックに入ったときは最初のバンドがやっているところだった。2番目が女性ヴォーカルのラモーンズみたいなザ・ソリューションズ。その次に1バンドやって、4番目がクールビューティー。以前1回ライブを見たことのあるGENOAのヴォーカルだった人がベースの新バンド。大部分の人が立ってききはじめる。1曲目が終って、ヴォーカルの人が一番前のはじに座っている女の子たちに「おまえら立たんか」と、ステージを降りその子たちの前まで行って立たせようとしたけど、女の子たちは座ったまま。2曲目の途中で出ていってしまった。ステージではヴォーカルの人とギターの人がこぜり合いみたいなことをやっていて険しい雰囲気。ヴォーカルの人は2曲目の終りあたりで、こんどはうしろで立ってきいている男の子たちにむかって「おまえら、おれたちを見に来たんだろう、チケット買ったんだろう、そんなら前に来い、けんか売りに来い」。誰も前に行かない。そうしたら「なんだけんかも売れないのか」だって。ステージの上のこぜり合いはつづいているし、私の心が拒絶するので4曲目くらいまでヴォーカルの人に焦点があわせられず、ベースの人を見たりしていたけど、おちつかない。だけどパワーがあるんだ、音楽に。でたらめじゃなくて、ちゃんとしているんだ、演奏が。それが強く感じられてきて、4曲目くらいからヴォーカルの人を見ていられるようになってきた。歌詞は社会や大人が俺を圧しつぶすとか、ほっといてくれとかいうふうな、ありふれたものなんだけど、迫ってくるものがあるんだ。「人は大人になると変わる。将来そういういやな大人になるおまえらのことを歌った歌だ」といってはじめた歌あたりから、私はクールビューティーが主張している場所と、その主張を圧しつけられている子どもたちのいる場所の、そのどちらにもいなくて、私は私自身の主張のある場所にいる気がしてきた。客観的であり同時に主観的であるともいえそうな。そして、「あなたはあなたのやりたいように音楽をやればいいでしょう。音楽をつかって何かをはっきり主張したければ、それもいいでしょう。このステージをやることが“けんかを売る”ってことなら、私は買うよ」って思った。だから「おれたちを気に入った奴は拍手しろ」といわれたとき、拍手をしましたよ。次のライブにも行こうと思いましたよ。

で、次にやったのがTHE WAIATS。クールビューティーめあてに来た人たちが出ていったせいか見てる人がだいぶ少なくなって、座っている人ばかりの中でステージがはじまった。3曲目くらいにやった「ダイヤモンド・アレー」でガガーンと来た。1カ所いつもとちがう歌詞になっていたのにもじひかれた。しかし、THE WAIATSのヴォーカルの人くらい見るたびに様子のちがう人っていないなァ。それが不思議で仕方ない。途中でヴォーカルの人のギターの弦が切れたかなにかして2曲ギターなしで歌ったけどパワーがあってききほれた。そして、ギターの人も弦が切れて、すこしの間ステージが中断。ギターがととのって、中断後の最後の2曲は1気にやった。この頃には最後のバンド、クラッカー・ジャックめあての人たちでいっぱいになってきた。

THE WAIATSにもやっぱり強く主張しているものがある。だけどクールビューティーとちがって、それを声高に表現せずにいる。クールビューティー、THE WAIATSそれぞれの伝わり方がある。THE WAIATSはその伝わり方、きく側の受けとり方を限定しない。曲名とライブ予定をいうだけで、あとは演奏だけに徹しているし、私はその方が潔いと感じられて好きだなァ。クールビューティーだと、きく方の心がちぢこまってしまう可能性もあるから。

THE WAIATSのステージのあとで、そんなことを思っていたら、クラッカージャックがはじまった。やる人たちときく人たちとのあいだに、あらかじめ了解が成り立っていて、その了解どうしにすすんでいく心地よさみたいな雰囲気が漂ってきて、私はライブハウスを出た。

LIVE: RABBIT FIGHT 1991.7.24 下北沢屋根裏

REALというバンドのやっている「RABBIT FIGHT」でthe HOCHIHMINH ROCKS, OUCH, REAL, THE BALLADの4バンドを見る。REALとTHE BALLADはよかった。とくにTHE BALLADは!!! ヴォーカル、ギター、ベース、ドラムがそれぞれしっかりとした意味をもっている。とくにギターはすばらしかった。4人の恐ろしい形相も、中指をたてることも全部きいている私たちの“小羊性”を撃ってくるしやっている側の“小羊性”も同時に撃っている。REALやTHE BALLADの音楽は胸の奥深くズシッと来る。だからみんなとびはねたりしないのだと思う。

REALのチラシ

WORDS: コリン・ウィルソン(「至高体験」より)

そしてたとえこの〈第三世界〉を自分本来の家として憧れたにせよ、それをわずかに垣間見るだけなのだ。この世界は一種の精神の眼でしか焦点を合わせられない。今朝、私が洗面所で歯を磨いているとブラームスの一節が私の脳裏をふと訪れ、突然、内なる暖かさを生んだ。〈コリン・ウィルソン〉と名付けられた人間など、もうどうでもよくなった。まるで自分の肉体から離れて宙へ漂いだしたような、まるで本当の〈私〉がどこか私自身とブラームスの間に場所を占めているような気持ちになった。同じように、私は調子よく働いている時、自己同一性を失なっているように思い、代わりに自分が書いている最中の考えや人物に同一化してしまう。しかしたびたびのことであるが、私は〈第三世界〉に焦点を合わせ始めることさえ、できない時もある。現実の世界が私を混乱させ、陳腐なく現実的なことがら〉から注意をそらすことを許さない。汽車のなかで愚か者たちが大声で諸君の読書が邪魔されるように。

とはいうもののこの〈第三世界〉とはやはり場所である。中国や日のように常にそこにある。私が私の名前で呼ばれる退屈な人格を離れて、いつでもそこに到達できるようにすべきだ。根本的に、純粋な《意・味》の世界なのだ。もちろん私の小さい個人的世界もまた意・味の世界であることは確かだ。しかしそれは取るに足らぬ個人的な意・味の世界、曲がった一面的な、虫けらの見た意・味の世界だ。

SONG: 「Say Anything」 WORDS・music・YOSHIKI

騒めきだけが心を乱して
聞こえない胸の叫び
時を忘れて求め彷徨う
高鳴る想い溺らして

Run away from reality I've been crying in the dream
凍りついた時間に震えて
歪んで見えない記憶重ねる
悲しみが消えるまで

You say anything 傷つけ合う言葉でも
Say anything 断ち切れないじに
You say anything Just tell me all your sweet lies
Say anything 演じきれないじに

If I can go back to where I've been
夢の中にだけ生きて
終らない雨に濡れる
流れる涙を白日夢に染めて

You say anything Whatever you like to say to me
Say anything You leave me out of my eyes
You say anything All I can hear is voice from dream
Say anything You can dry my every tear

灯りの消えた On the stage 1人見つめて
通り過ぎた日々に抱かれる
壊してくれ何もかも飾った愛も
時の砂に消えるまで

Close your eyes
and I'll kill you in the rain
狂騒に殺し合えば
造花の墓厳に埋もれた
詩人の涙は記憶に流れて

Time may change my life
But my heart remains the same to you
Time may change your heart
My love for your never changes

You say anything 傷つけ合う言葉でも
Say anything 断ち切れないじに

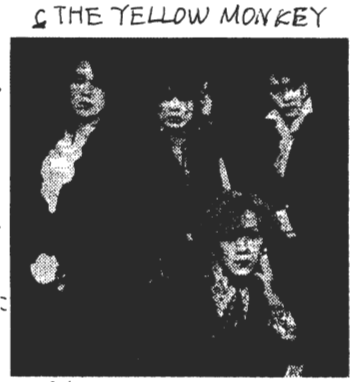
You say anything...Say anything
Now you've gone away
Where can I go from here?
Say anything...Say anything...

"I believed
If time passes, everything
turns int beauty
If the rains stop, tears clean
the scars of memory away
Everything starts weaning fresh colors
Every sound begins playing
a heartfelt melody
Jealousy embelishes a page of the epic
Desire is embraced in a dream
But my mind is still in chaos and....."

「Run away from reality」! そう、コリン・ウィルソンが「私が私の名前で呼ばれる退屈な人格を離れて」と書いていることと同じ。Xの「Jealousy」は、私を現実(リアリティ)から離れさせてくれる。「Say Anything」をきくと「まるで本当の〈私〉がどこか私自身とYOSHIKIの間に場所を占めているような気持ち」になる。

LIVE:

THE VANILA 7/19 新宿ACB
ヴォーカルが硬質でパワフルですき。
そして、ベースが色気があってすてき。
次のライブ: 8/16 ラ・ママ

THE YELLOW MONKEY 7/21 ラ・ママ
ヴォーカルから実にゆたかにことばが伝わってくる一方、ギター、ベース、ドラムから、とくにギターからゆたかに沈黙が伝わってきてとてもよかった。
次のライブ: 8/10 ルート14, 8/18 7thアベニュー, 8/31 大宮フリークス, 全てCDプレゼントあり。

© THE YELLOW MONKEY